



坂本 達哉 教授

専門:社会思想の歴史と理論

(インタビュアー:春原・菊井)

『哲学者・社会学者としてのヒュームについて研究』

Q. 坂本先生の専門とされている研究内容はなんですか？

私の専門は、社会思想及び社会思想史です。社会思想といっても幅は広いのですが、私の講義の特徴は慶應の経済学部の伝統に根差しているという点で、経済学をベースにした社会思想史ということになります。慶應義塾には長い伝統があり、私の研究も塾長であった小泉信三や重商主義の研究で有名な高橋誠一郎といった偉大な先人たちの継承であると考えています。私の場合は特に経済学が生まれた時代のイギリスを対象にしており、とくに、18世紀のスコットランドの哲学者であるヒュームについて専門的に研究しています。ヒュームはイギリスで最も偉大な哲学者と言われていますが、私は哲学者としてももちろん、社会学者としてのヒュームについて研究しています。

ヒュームは同時代・同世代の経済学者であるアダム・スミスの重要な先駆者と昔から言われていますが、私はそのようなヒュームを、スミスの先駆者でありながら独自の個性を持った思想家としてより深く幅広く研究してきました。ヒュームの時代はまだ経済学としての経済学というものが存在していなかったのですが、その中でヒュームは徹底した経験主義をとったことが特徴です。そして、その集められた事実の中に普遍的な法則性を見出すことを意識的に行った人でもあります。これは当時としては非常に稀有な、経済学の哲学的な方法であり、このヒュームの方法論をもとにスミスも『国富論』を書いたとされるので、もしもヒュームの哲学的な方法論がなければスミスの経済学もなかったのではないかと考えられます。

このような経済学の方法だけではなく、ヒュームは現代の経済学の理論の創始者でもあります。一番有名なものとして「貨幣数量説」が挙げられますが、

ヒュームはこれに非常に厳密な定式化を与えました。また、この貨幣数量説を具体的に貿易論などで明らかにしており、このことは現代の経済学者にもたかく評価されています。ここまでの話だと経済思想中心の話になっていますが、私はその他にも政治思想や哲学、道徳についても研究してきました。それらについて論じないとヒュームを論じたことにはならないからです。たしかに経済論は中核にあります。政治や道徳も含めて総合的に研究してきました。

『学生を子供とみなさない!』

Q. 坂本先生の教育理念を教えてください

ゼミの特徴は、大教室の授業での一方通行を是正するという点にあります。欧米の大学では大教室でも100人程度であり、双方向の授業が行われているため、ゼミは存在しません。しかし日本では、双方向の授業が不可能な環境にあります。その中でも私は学生にマイクを向けて、双方向の授業を展開するということをしており、それは効果があると感じていますが、限界があります。ゼミでは少人数で、先生と学生が顔を1対1で見ながら議論ができるというのが一番大きいと考えます。個人的な話題や学問的に曖昧な部分も話せるというのもメリットであり、学生からも先生が近く感じられると思います。とくに慶應の場合は福澤諭吉以来の「半学半教」という伝統があり、これは学生と教師というのが対等であるということです。中高までとは違い、大学生はみな大人であると私は考えており、人生経験や年齢の違いはありますが、人間として基本的に対等です。これは講義でももちろんですが、ゼミにおいて最もよく表れる部分です。そのため、私のポリシーは『学生を子供とみなさない』ということになります。学生のことを「子」と呼ぶ先生も少なくありませんが、私は学生のことを決して半人前とみなさないと考えているため、そうはしません。学生から学ぶことも多いし、学びたいとも考えています。

『イギリスが好きだった!』

Q. 坂本先生の学生時代のお話を聞かせてください

私は学生時代「英語会（KESS）」に入っており、英語弁論というセッションで活発に活動していました。英語弁論は中高生のころからやっており、英語が好きで学生でした。その反面スポーツは苦手だったので、大学時代は社会思想の勉強と英語をメインに活動していました。英語会で知り合った友人はビジネスの世界に行った人も多く、自分とはタイプの違う学生と幅広く接することで現実と思想のバランスをとっていたと思います。

社会思想に興味を持ったきっかけとしては、中学生頃からイギリスが好きだったという点にあると思います。そこから英語も好きになり、ヒュームというイギリスの社会思想について興味を持ちました。イギリスの中でもなぜ社会思想の道に進んだかという点では、慶應の経済学部に入ったという点が大きいと思います。今考えても、私は法学部や文学部よりも経済学部が性に合っていると感じます。当時はそこまで考えていたわけではないのですが、財やサービスの生産と交換という人間の基本的な活動に、近いものを感じていました。経済活動というのは人間社会の根本であると感じ、またイギリスが好きだったということも併せて今の研究があると思います。

『古典に触れることの大切さ』

Q 坂本ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

何よりもまず「古典」に触れてほしいと思います。今の学生に「スミスを読んだか？」と聞いても、ほとんどは、「解説本は読みました」という返事が返って来ます。しかし、スミス自身の作品とその解説本とは天と地ほどの差があります。私のゼミでは欧米の古典的作品群を輪読という形で発表して進めていくので、そういうことに興味がある人に志望して欲しいと思います。「古典の解説書を読んだほうが早い」という考え方も一概に否定するわけではないですが、現代に残っているエッセンスというのは200年くらい変わりません。原点にかえて問題の本質を極めるということが古典の魅力であると思います。

『知るという経験を追求してください!!』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

大学生でないとできないことを見つけてやってください。もちろんスポーツや音楽に熱中するのもいいとは思いますが、それは言ってしまえば一生できることだと思います。それに対して本当の学問は学生時代にしかできないと思います。社会に出ると組織に入るためどうしても自由が奪われてしまうのに対し、大学生はそのような制約が一切ないため好きなことが追求できるわけです。大学生は大人であり、組織のしがらみからも解放されているため思想の自由の重要性を一番知ることができる時代です。また、『知る』という経験は社会に出た後も生きてくるものだとも思います。自分の好きなものを知るという経験が社会に出た後の自信にもなるし、自分の考え方を鍛える上での基礎でもあると思います。ですから講義やゼミの選択でも自分の興味関心の持ったものを選択して欲しいと思います。

三田では日吉に比べ専門的な学問を扱いますが、その中でこのトピックについて誰にも負けないくらい深く勉強したという勉強の仕方をしてください。日吉の勉強は基盤づくりです。三田の勉強はそこからさらに掘り下げた勉強であり、ゼミというのはその方法の1つであります。ゼミに入る・入らないは個人によりますが、そういう掘り下げた勉強をして欲しいと思います。

<編集後記>

アダム・スミスよりも前のヒュームの思想から現代の経済学までがつながっているということをお聞きして、経済学の伝統というものを感じました。また、慶應の「半学半教」をもとに、ゼミなどで受け身にならずに積極的に議論できる慶應生のあるべき姿を再認識することができました。お忙しい中、インタビューをお受けいただき、誠にありがとうございました。

春原